

『金光明經 如来寿量品』と『大雲經』

鈴木 隆 泰

1. はじめに

『金光明經』(*Suvarṇaprabhāsa*, *Suv*)のサンスクリット刊本の校訂者J. Nobel 以来の疑問であった *Suv* の「如来寿量品」中にある増広部の出典が、『大雲經』(*Mahāmeghasūtra*, *MMS*)である可能性がすでに指摘されている⁽¹⁾。本稿では、この *Suv* の増広部と *MMS* との関係を諸本対照を通じて比較することによって精査し、上記の問題に考察を加えることを目的とする。

2. 『金光明經』*Suv* のテキスト

現在我々が手にできる『金光明經』(*Suvarṇaprabhāsa*, *Suv*)のテキストには、重訳を除くと、サンスクリット刊本・チベット訳・漢訳に、次のものがある。

サンスクリット⁽²⁾ : *Suv_S* (*Suvarṇabhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937)

チベット訳⁽³⁾ : *Suv_{Ti}* (P No.176, 'phags pa gSer 'od dam pa mdo sde'i dbaṅ po'i rgyal po źes bya ba theg pa chen po'i mdo, ārya-Suvarṇaprabhāsottamasūtrendrarāja-nāma-mahāyāna-sūtra, tr. unknown)

*Suv*_{T2} (P No.175, do., tr. by Jinamitra, Śilendrabodhi
and Ye šes sde)

*Suv*_T (*Suvarṇaprabhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel,
Leiden, 1944)

漢訳: *Suv*_{C1} (T. No.663, 『金光明經』四卷, 曇無讖訳)

*Suv*_{C2} (T. No.664, 『合部金光明經』八卷, 宝貴合糅)

*Suv*_{C3} (T. No.665, 『金光明最勝王經』十卷, 義浄訳)

現存最古の資料である5c.の『金光明經』*Suv*_{C1}が四卷本であるのに対し、6c.の『合部金光明經』*Suv*_{C2}では八巻に、8c.の『金光明最勝王經』*Suv*_{C3}では十巻に増広されている。現存サンスクリットテキスト*Suv*_Sとそれに対応するチベット訳*Suv*_{T1}は比較的*Suv*_{C1}に近いが、増広を受けている点では*Suv*_{C2}、*Suv*_{C3}と同様である。もう一つのチベット訳*Suv*_{T2}は現存サンスクリットテキストと対応せず、内容的には*Suv*_{C2}と*Suv*_{C3}との間に位置する⁽⁴⁾。

このように多様な発展を遂げてきた*Suv*の中で、本稿で扱う増広部は、第2章「如来寿量品」(*Tathāgatāyuhpramāṇanirdeśaparivarta*)中の、*Suv*_S、*Suv*_{T1}、*Suv*_{T2}、*Suv*_{C2}、*Suv*_{C3}全てに共通するものである⁽⁵⁾。

3. 原初形「如来寿量品」の構成

現存最古の*Suv*_{C1}に基づき、原初形、もしくは原初形に最も近いと思われる『金光明經 如来寿量品』の構成を概観しておこう。仮にセクションを§Aから§Eの5つに分けると、以下のようになる(*Suv*_{C1}: 335c17-336b9)。

§A: 王舎城に住む信相(Ruciraketu⁽⁶⁾)菩薩が、長寿のはずの釈尊が80歳で入滅することに疑問を抱き、如来を念ずる。(335c17-26)

§B：すると奇特が生じ、四方に四如来（阿閼 Akṣobhya⁽⁷⁾、宝相 Ratnaketu、無量寿 Amitāyus、微妙声 Dundubhisvara⁽⁸⁾）が現れ、衆生は種々の利益を受ける。（335c26-336a10）

§C：信相は歡喜踊躍しつつ釈尊の寿命の短さについて質問する。四如来は如来以外、如来の寿命を思議することはできないと答える。（336a10-18）

§D：四如来の神力で信相の室に一切衆が集合する。四如来は釈尊の寿命が不可量である旨の偈を説く。（336a18-b5）

§E：四如来より如来の寿命が無量であることを聞いた信相は歡喜踊躍し、衆生たちは菩提心を起こす。四如来は忽然として消え去る。（336b6-9）

以上をもって *Suv_{CI}* の「如来寿量品第二」は完結し、テーマを変えて「懺悔品第三」が始まる。本研究で扱う増広部は§Dと§Eとの間に位置しており、分量はノーベル刊本で8ページほどに相当する⁽⁹⁾。

4. 増広部の内容と問題点

さて、問題の増広部の内容を提示し、問題点を検討してみよう。

4.1. 増広部の内容

増広部の内容は以下の通りである。

- (1) 会座のカウンディニヤ（ācāryavyākaraṇa-Kauṇḍinya）婆羅門が世尊に賜物を要求するが、世尊は黙して語らない。（*Suv_S* 12.6-13, *Suv_T* 12.13-26, *Suv_{C2}* 361b25-c6, *Suv_{C3}* 406a1-9）
- (2) 仏陀の威力を受けたりッチャビ族の一切世間樂見（Sarvalokapriyadarśana）童子が、自分が賜物をあげようとカウンディニヤ婆羅門に申し出る。（*Suv_S* 13.1-4, *Suv_T* 13.1-6, *Suv_{C2}* 361c6-10, *Suv_{C3}* 406a9-11）

- (3) カウンディニャ婆羅門は、天界を得るため世尊の遺骨 (dhātu) を望んでいることを一切世間樂見童子に告げる。この箇所は *Suv*_{C2}, *Suv*_{C3} において話者の交替が見られるため、(3-1), (3-2), (3-3) に分けた。(*Suv*_S 13.4-14.9, *Suv*_T 13.7-25, *Suv*_{C2} 361c10-26, *Suv*_{C3} 406a12-27)
- (4) 一切世間樂見童子が、世尊の遺骨の不可得性を強調する 13 偈を説く。この偈と同形式のものが *Jātaka No.425 (Jā 425)* に見いだせる。(*Suv*_S 14.10-17.6, *Suv*_T 14.1-15.28, *Suv*_{C2} 361c27-362b4, *Suv*_{C3} 406a27-b27, *Jā 425* 477.6-478.6)
- (5) (4)を受けてカウンディニャ婆羅門が童子を讃え、如来は法身 (dharma-kāya) で、遺骨などはないのだという 8 偈を説く。(*Suv*_S 17.7-18.11, *Suv*_T 16.1-17.6, *Suv*_{C2} 362b5-23, *Suv*_{C3} 406b28-c14)
- (6) さらに上記の説を受けて、会座にいた多くの天子たちが菩提心を起こし、如来は常住 (nitya) で涅槃は方便であるという 2 偈を説く。(*Suv*_S 18.12-19.4, *Suv*_T 17.7-19, *Suv*_{C2} 362b24-c3, *Suv*_{C3} 406c15-21)

以上で増広部は終了し、§Eに唐突に連結している。この増広部のテーマは「如来は法身であり常住であること」、「如来に遺骨がないこと」、「涅槃は衆生を導くための方便であること」の3点である⁽¹⁰⁾。

4.2. 増広部の問題点

まず、この増広部には登場人物に関する問題がある。

この増広部の主要な話者は“カウンディニャ婆羅門”と“一切世間樂見童子”であるが、どちらもこの箇所以前には *Suv* には登場していない。特に後者の“一切世間樂見童子”に限れば、この増広部を除き二度と登場しないのである⁽¹¹⁾。これは童子が「遺骨の不可得」を説くことによって世尊の代わりまで務めていることを考えると、余りに不自然である。

また、3 で見たように、この「如来寿量品第二」に登場する如来は四如来のみであって、釈尊は登場しない。しかし、増広部中に現れる世尊は名前こそ明示されていないが全て単数形で表されており、この箇所を見る限り釈尊を指していると解さざるを得ない⁽¹²⁾。

さらに、§Dと§Eの間にこの増広部が挿入されることによって、増広部(6)と§Eとの接続が極めて通りの悪いものとなっている⁽¹³⁾。これを「文脈の齟齬」と呼ぶことにする。

このように、この増広部にはまず「登場人物の問題」と「文脈の齟齬」という2つの問題点があるのである。

5. 『大雲經』 (*Mahāmeghasūtra*, *MMS*)

上記の増広部と平行なフレーズを有する *MMS* について、テキストと内容を紹介しておこう。

5.1. *MMS* のテキスト

『大雲經』*MMS* のサンスクリット原典は散逸して伝わらず、わずかに『楞伽經』、『文殊師利問經』の中に経名が引用されるのみである⁽¹⁴⁾。資料としては以下のチベット訳 *MMS_T* 及び漢訳 *MMS_C* を使用する⁽¹⁵⁾。

チベット訳 *MMS_T*: 'phags pa sPrin chen po źes bya ba theg pa chen po'i
mdo.

ārya-Mahāmegha-nāma-mahāyāna-sūtra.

tr. by Surendrabodhi and Ye śes sde.

P (Peking) No.898, mDo sna tshogs, Dzu 121a4-237a6.

N (Narthang) No.217, mDo sde, Tsha 175b6-331a1.

S (Stog Palace Manuscript) No.81, mDo sde, Ta 1b1-155b1.

T (Tokyo Manuscript) No.82, mDo sde, Ta 1b1-143a8.

D (Derge) No.232, mDo sde, Wa 113a1-214b7.

L (Lhasa) No.233, mDo mañ, Tsha 180a6-337b7.

漢訳 *MMS_C* : 『大方等無想經』六巻, 曇無讖訳, T. No.387, 1077c-1107b.

上記のうち, *Suv* の増広箇所に対応する部分は, *MMS_T* 194b7-196a7, 202b5-7 ; *MMS_C* 1096c4-1097a27, 1099a9-14 である。

5.2. *MMS* の内容

MMS は「如来は法身 dharmakāya であり常住 nitya」, 「如来の涅槃は方便 upāya」であることを一貫して主張する経典である。チベット訳 *MMS_T* は 38 の Chapter (漢訳 *MMS_C* は 37 章) より構成されている。

主要な登場人物は“大雲密蔵 (sPrin chen sñin po, *Mahāmeghagarbha) 菩薩”と“一切世間楽見 (’Jig rten thams cad kyis mthoñ na dga’ ba, *Sarvalokapriyadarśana) 童子”であり, 特に後者は未来世の *MMS* の担い手として重要な役割を果たしている。

6. *Suv* と *MMS*

Suv の中心思想は懺悔 (deśanā) である⁽¹⁶⁾。一方 *MMS* の中心思想は上記 5.2 に記したように, 「如来法身」と「方便涅槃」である。すなわち, 4.1 に記

した *Suv* の増広部のテーマは *MMS* の中心思想と一致するのである。これを「思想的脈絡」と呼ぶこととする。

また、*MMS* においては授記で未来仏が説かれることはあっても、経を説く会座にいる世尊は常に釈尊である。

さらに注意すべき点は、*MMS_C* の訳者も *Suv_{Cl}* の訳者も、どちらも曇無讖であるということである。すなわち曇無讖の訳出時には、*Suv* に後世挿入されることになる文脈がすでに *MMS* に存在していたのである。これを「漢訳者の問題」と呼ぶこととする。

以上、5.2、及びこの「思想的脈絡」、「漢訳者の問題」も併せれば、4.2 で取り上げた「登場人物の問題」、「文脈の齟齬」を含めた問題点全てに対し、

“*Suv* の増広部の出典は *MMS* であり、*Suv* は *MMS* を受けて増広を行った”

と想定することにより説明がつけられるのである。

以下、7 において諸本対照比較に基づき、その可能性を検証していくこととする⁽¹⁷⁾。

7. 諸本対照比較

以下、*Suv_S*、*Suv_T*、*Suv_{C2}*、*Suv_{C3}*、*Jā 425*、*MMS_T*、*MMS_C* という 7 種の異本異言語異訳に基づいてこの増広箇所を考察するとともに、散逸した *MMS* のサンスクリット文 *MMS_S* を再構築していこう⁽¹⁸⁾。

- (1) 会座のカウンディニヤ婆羅門が世尊に賜物を要求するが、世尊は黙して語らない。

Suv_S : atha khalu tasmin samaye tatra parṣady ācāryavyākaraṇa-Kauṇ-

ḍinyo nāma brāhmaṇo 'nekair brāhmaṇasahasraiḥ sārddhaṃ
bhagavataḥ pūjākarmaṃ kṛtvā tathāgatasya mahāparinirvāṇaśab-
daṃ śrutvā sahasā purato bhagavataś caraṇayor nipatya
bhagavantam evam⁽¹⁹⁾ āha// sacet kila bhagavān sarvasattvānu-
kampako mahākāruṇiko hitaiṣi sarvasattvānāṃ mātāpitṛbhūtaḥ
asamasamabhūtaś candrabhūta ālokaḥ mahāprajñājñānasū-
ryasamudgataḥ/ yadi tvaṃ sarvasattvānāṃ Rāhulasyeva saṃpaśyasi
mahyam ekaṃ varaṃ dehi/

bhagavāṃs tuṣṇībhūto 'bhūt//(12.6-13)

Suv_T : de nas de'i tshe 'khor der slob dpon luñ ston pa bram ze Kau di
nya žes bya ba dañ/ bram ze stoñ phrag du mas bcom ldan 'das la
mchod pa byas te/ de bžin gšegs pa yoñs su mya ñan las 'das pa chen
po'i sgra thos nas/ 'phral la 'dus te/ bcom ldan 'das kyi žabs gñis la
gtugs nas/ bcom ldan 'das la 'di skad ces⁽²⁰⁾ gsal pa/ gal te bcom ldan
'das sems can thams cad la thugs brtse ba/ thugs rje chen po dañ ldan
pa/ phan par bžed pa/ sems can thams cad la pha ma lta bu/ mi mñam
pa dañ mñam par gyur pa/ zla ba lta bu/ snañ bar mdzad pa/ šes rab
dañ ye šes chen po'i ñi ma šar ba lta bu lags šin/ gal te khyod sems can
thams cad la sGra gcan zin bžin du gzigs na/ bdag la dam pa žig stsal
du gsol/

bcom ldan 'das cañ mi gsuñ bar gyur to//(12.13-26)

Suv_{C2} : 是時大会有婆羅門，姓僑陳如，名曰聖記，在於衆中諦心安坐，無量
百千婆羅門衆，前後圍繞，而共恭敬供養如來，聞仏世尊壽命八十億般涅槃，
涕淚悲泣，與於百千婆羅門衆，俱從坐起頂礼仏足白言。世尊，若仏如來憐

愍利益一切衆生，大慈大悲欲令皆悉得大安樂，為衆生作真實父母，最上無等及無等等，為世間作歸依覆護，令諸衆生快樂清涼，如淨滿月作大光明，如日照於優陀延山，若仏世尊等觀衆生如羅睺羅，願仏為我施一恩德。

是時如來默然不答。(361b25-c6)

Suv_{C3} : 時大会中有婆羅門，姓憍陳如，名曰法師授記，與無量百千婆羅門衆，供養仏已，聞世尊説入般涅槃，涕淚交流前礼仏足白言。世尊，若實如來於諸衆生有大慈悲，憐愍利益令得安樂，猶如父母余無等者，能與世間作歸依如淨滿月，以大智慧能為照明如日初出，普觀衆生愛無偏党如羅怛羅，惟願世尊施我一願。

爾時世尊默然而止。(406a1-9)

MMS_T : de nas de'i tshe slob dpon luñ ston pa bram ze Kau ṇḍi nya ⁽²¹⁾
dañ/ bram ze g'zon nu brgya stoñ du ma dag gis bcom ldan 'das la
mchod pa byas te/ bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to// gal te bcom
ldan 'das sems can thams cad la thugs brtse ⁽²²⁾ žiñ/ gal te khyod sems
can thams cad la sGra gcan zin b'zin ⁽²³⁾ du gzigz na ⁽²⁴⁾/ bdag la dam
pa gcig stsal du gsol/

bcom ldan 'das cañ mi gsuñ bar gyur nas/(194b7-195a1)

MMS_C : 爾時善德以諸香華幡蓋伎樂供養於仏，合掌恭敬白仏言。世尊，大慈憐愍一切如羅睺羅，今欲啓請，惟願聽許。

爾時世尊默然不答。(1096c4-6)

Suv_S, *Suv_T* に見られる“nāma”, “žes bya ba”が、この箇所がカウンディニャ婆羅門⁽²⁵⁾の初出箇所であることを端的に表している。*Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* にも

名前の紹介がある。一方、*MMS_T* と *MMS_C* ではカウンディニャ婆羅門は以前よりの登場人物であるため、“nāma”等に相当する語はない。*MMS* の方が *Suv* より短く単純な形式をしていることも、*MMS* がこの増広部のオリジナルであることの傍証と考えられる。

世尊 (bhagavat, bcom ldan 'das) が単数であることから、この世尊は「四如来」ではなく「釈尊」を示していると思われる。6 で述べたように、*MMS* においては世尊はこの箇所以前より一貫して釈尊である。

MMS_T は *Suv_T* 中に文脈上完全に対応箇所を見いだせるため、*Suv_S* を用いて以下のように *MMS_S* を再構築できる。

MMS_S : *atha khalu tasmin samaya ācāryavyākaraṇa-Kauṇḍīnyo brāhmaṇo 'nekair brāhmaṇakumāraśatasahasraiḥ sārddham bhagavataḥ pūjākarmaṃ kṛtvā bhagavantam evaṃ āha// sacet kila bhagavān sarvasattvānukampakaḥ/ yadi tvaṃ sarvasattvānām Rāhulasyeva saṃpaśyasi mahyam ekaṃ varaṃ dehi/
bhagavāṃs tuṣṇībhūto 'bhūt/*

- (2) 仏陀の威力を受けたリッチャビ族の一切世間樂見童子が、自分が賜物をあげようとカウンディニャ婆羅門に申し出る。

Suv_S : atha buddhānubhāvena tasmin parśadi Sarvalokapriyadarśano nāma Litsavikumāras tasya pratibhānam utpannaṃ sa ācāryavyākaraṇa-Kauṇḍīnyaṃ brāhmaṇam evaṃ āha/ kiṃ nu tvaṃ mahābrāhmaṇa bhagavantam ekaṃ varaṃ yācase/ ahaṃ te varaṃ dadāmi/

(13.1-4)

Suv_T : de nas saṅs rgyas kyi mthus 'khor der Liñ tsa byi gžon nu 'Jig rten

thams cad kyis mthoñ na dga' ba źes bya ba de spobs pa skyes nas/
slob dpon luñ ston pa bram ze Kau di nya la 'di skad ces smras so// ci
bram ze chen po khyod bcom ldan 'das la dam pa źig gsol lam/ bdag
gis khyod la dam pa źig sbyin no//(13.1-6)

*Suv*_{C2} : 於此会中有栗車毘国王童子，名曰一切衆生喜見，在大衆中具足辞弁
善能問答。是時王子承仏神力，語婆羅門憍陳如言。大婆羅門，汝於世尊求
何恩德。我能為汝施如意恩。(361c6-10)

*Suv*_{C3} : 仏威力故，於此衆中有梨車毘童子，名一切衆生喜見，語婆羅門憍陳
如言。大婆羅門，汝今從仏欲乞何願。我能與汝。(406a9-11)

*MMS*_T : sañs rgyas kyis mthus 'khor chen po'i nañ nas Liñ tsa byi ⁽²⁶⁾ gźon
nu 'Jig rten thams cad kyis mthoñ na dga' ba źes bya bas/ slob dpon
luñ ston pa bram ze Kau ṇḍi nya ⁽²⁷⁾ la 'di skad ces smras so// ci ⁽²⁸⁾
bram ze chen po khyod ⁽²⁹⁾ bcom ldan 'das la dam pa źig gsol ⁽³⁰⁾ lam/
bdag gis khyod la dam pa sbyin no ⁽³¹⁾//(195a1-2)

*MMS*_C : 是時衆中有梨車童子，名曰一切衆生樂見，語善德言。如來默然已不
相許。我今當答隨疑到問。(1096c7-9)

“pratibhāna”の部分以外，*Suv*_Tと*MMS*_Tの文脈上の差異は見られないので，*Suv*_Sを用いて以下のように*MMS*_Sを再構築した。

*MMS*_S : *atha ⁽³²⁾ buddhānubhāvena tasmin mahāparśadi Sarvaloka-
priyadarśano nāma Litsavikumāra ācāryavyākaraṇa-Kauṇḍīyaṃ

brāhmaṇam evam āha/ kiṃ nu tvaṃ mahābrāhmaṇa bhagavantam
ekaṃ varaṃ yācase/ ahaṃ te varaṃ dadāmi/*

- (3) カウンディニヤ婆羅門は、天界を得るために世尊の遺骨 (dhātu) を望んでいることを、一切世間樂見童子に告げる。

(3-1)

Suv_S : brāhmaṇa āha/ aham asmiṃ Litsavikumāra bhagavataḥ pū-
janāya bhagavataḥ sarṣapaphalamātraṃ dhātum icchāmi niveśitum
cūrṇadhātum abhiprayojanāyainaṃ sarṣapaphalamātraṃ dhātum
abhipūjayitvā tridaśādhīpatyaṃ labhyata ity evaṃ śrūyate/(13.4-8)

Suv_T : bram zes smras pa/ Liñ tsa byi gžon nu bdag ni bcom ldan 'das
la mchod pa dañ riñ bsrel gyi phye ma bgos pa'i phyir/ bcom ldan 'das
kyi riñ bsrel yuñs 'bru tsam la bsten par 'dod do// riñ bsrel yuñs 'bru
tsam de mñon par mchod na/ sum cu rtsa gsum pa'i lha rnam s kyi bdag
po 'ba' žig 'thob ces grag go/(13.7-12)

Suv_{C2} : 婆羅門言。善哉王子，我等願欲恭敬供養世尊之身，是故欲得如來舍利是芥子許。所以者何。如我所聞若善男子及善女人，恭敬供養如來舍利，六天帝主富貴安樂必得無窮。(361c10-14)

Suv_{C3} : 婆羅門言。童子，我欲供養無上世尊，今從如來求請舍利如芥子許。何以故。我曾聞說若善男子善女人，得仏舍利如芥子許恭敬供養，是人當生三十三天而為帝釈。(406a12-15)

MMS_T : bram zes smras pa/ kye ⁽³³⁾ Liñ tsa byi ⁽³⁴⁾ gžon nu bdag ni bcom

ldan 'das kyi ⁽³⁵⁾ riñ bsrel mchod pa'i phyir/ bcom ldan 'das la riñ bsrel
yuñs 'bru tsam žig gsol gyis ⁽³⁶⁾ de khyod kyis byin cig/ riñ bsrel yuñs
'bru tsam de mñon par mchod na sum cu rtsa gsum pa'i bdag por ⁽³⁷⁾
'gyur ro žes grags pas ⁽³⁸⁾ na/ riñ bsrel gyi phye ma dkar ⁽³⁹⁾ ru ni šin
tu ⁽⁴⁰⁾ gces ⁽⁴¹⁾ so// (195a2-4)

MMS_C : 婆羅門言。梨車，我曾從他聞如是義。若能供養如来舍利如芥子許，
福報應得切利天主。(1096c9-11)

Nobel [1937] 13.fn13 に指摘されているように，*Suv_S* はかなり乱れている。
特に “cūrṇadhātum abhiprayojanāya” の部分は冗長であり，*Suv_T* と比較し
ても会通しがたい。

一方，*MMS_T* には “cūrṇadhātum abhiprayojanāya” に相当する読みが存在
せず，代わりに “de khyod kyis byin cig” となっており，文意が明快であ
る。このチベット文は(1)，(2)の *Suv_S* を参照することにより，“taṃ tvam dehi”
と再構築することが可能である。

MMS_T の末尾にある “riñ bsrel gyi phye ma dkar ru ni šin tu gces so” に
ついては，*Suv_T*，*MMS_C*，*Suv_S* いずれにも対応が無い。しかし，“riñ bsrel gyi
phye ma” は *Suv_S* に “cūrṇadhātu” の読みが確認され，さらに，*Suv_S* 222.11，
228.1；*Suv_T* 164.17，167.24 において “priya” が “gces” と訳出されているこ
とから，“ity atipriyaḥ śukracūrṇadhātuḥ” というサンスクリット文を再構築
することができる。

MMS_S : *brāhmaṇa āha/ ahaṃ bho Litsavikumāra bhagavato dhātum
pūjanāya bhagavataḥ sarśapaphalamātraṃ dhātum yāce/ taṃ tvam
dehi/ sarśapaphalamātraṃ dhātum abhipūjayitvā tridaśādhipatyo

bhaviṣyatīty evaṃ śrūyate/ ity atipriyaḥ śukracūrṇadhātuḥ/*

(3-2)

Suv_s : śṛṇu tvam Litsavikumāra Suvarṇabhāsottamasūtram durvijñeyam duranubodham sarvaśrāvakaḥpratyekabuddhānām tādr̥śairlakṣaṇaguṇaiḥ samanvāgataṃ kila Suvarṇabhāsottamasūtram bhāvayiṣyati/(13.8-14.2)

Suv_T : kye Liñ tsa byi g̃zon nu gSer 'od dam pa'i mdo ñan thos dañ rañ sañs rgyas thams cad kyis śes par dka' ba/ khoñ du chud par dka' ba/ de lta bu'i mtshan ñid dañ yon tan dañ ldan pa/ gSer 'od dam pa'i mdo 'chad ces grag gis ñon cig/(13.12-16)

Suv_{C2} : 是時王子即便答言。大婆羅門，汝一心聽。若欲願求無量功德及六天報，此金光明諸經之王，難思難解福報無窮，聲聞緣覺所不能知，此經攝持如是功德，無辺福報不可思議。我今為汝略說之耳。(361c14-19)

Suv_{C3} : 是時童子，語婆羅門曰。若欲願生三十三天受勝報者，應當至心聽是金光明最勝王經。於諸經中最为殊勝，難解難入，聲聞獨覺所不能知。此經能生無量無辺福德果報，乃至成弁無上菩提。我今為汝略說其事。

(406a16-21)

MMS_T: kye Liñ tsa byi ⁽⁴²⁾ g̃zon nu sPrin chen po'i mdo ⁽⁴³⁾ ñan thos dañ rañ sañs rgyas thams cad kyis śes par dka' ba/ khoñ du chud par dka' ba/ mtshan ñid de lta bu dañ⁽⁴⁴⁾ ldan pa yañ⁽⁴⁵⁾/ sPrin chen po'i mdo las phyi rol tu ⁽⁴⁶⁾ gyur ces grags ⁽⁴⁷⁾ pa ñon cig/(195a4-5)

MMS_C: 梨車, 是大雲經其義甚深, 如來密語難可得解, 非諸聲聞緣覺所知。

(1096c11-12)

4.1 で触れたように, この(3-2)における最大の問題点は, *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* において話者がカウンディニヤ婆羅門から一切世間衆見童子に交替していることである。

実際, 話者がカウンディニヤ婆羅門である *Suv_S*, *Suv_T* と, 話者が童子に交替している *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* とを比較すると, 後者の方が読みやすく, Nobel [1937], Idzumi [1931] とともに *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* の読みを評価している⁽⁴⁸⁾。

Suv_S, *Suv_T* が会通しがたい原因は, 末尾の “Suvarṇabhāṣottamasūtram bhāvayiṣyati”, “gSer ’od dam pa’i mdo ’chad” にある。*Suv_S* では,

- sūtram を acc. sg. n. ととり, 「『金光明經』を勤修すべき」と読むか,
- sūtram を nom. sg. n. ととり, 「『金光明經』はあるべき」と読むか⁽⁴⁹⁾

の2通りがある。また *Suv_T* では *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* と同様に

- 「『金光明經』を説示する」

と読んでいる⁽⁵⁰⁾。ここで注意すべきは, 「勤修」か「説示」かの違いはあるにせよ, いずれも

話者が『金光明經』に通じている

という文脈を形成していることである。そのため, 話者が童子へと交替している *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* に比較して, 話者が婆羅門の *Suv_S*, *Suv_T* においては文意を掴むことが非常に難しくなっているのである。

一方の *MMS* を見てみると, *MMS_T*, *MMS_C* とともに話者は *Suv_S*, *Suv_T* と同様カウンディニヤ婆羅門である。*MMS_T* には上記の問題点の原因となっている文の代わりに, “sPrin chen po’i mdo las phyi rol tu gyur” という文があり, また *MMS_C* には対応する文自体が存在していない⁽⁵¹⁾。

MMS_T の “sPrin chen po'i mdo las phyi rol tu gyur (『大雲經』に関われないところにいる, 『大雲經』の側から見て外道である〔とされている〕)” という発言は, 「『大雲經』は理解しがたい。だから世尊の遺骨を供養して天界を得ることを欲するしかない」と願うカウンディニャ婆羅門の言葉として極めて納得のいくものである。

さらに“*phyi rol tu gyur*”に対応するサンスクリットとして“*bāhya+√bhū*”が考えられる⁽⁵²⁾。

以上を総合すると,

- ・当初, この(3-2)に相当する箇所は *MMS* においては, 「自分は『大雲經』には縁がない」というカウンディニャ婆羅門の言葉であった。
- ・*Suv* がこの箇所を *MMS* より導入して増広を行った際, もしくはその後の伝承の過程において, *MMS* に元来あった *bāhya+√bhū* が *bhāvayīṣyati*, もしくは *bhāṣayīṣyati* 等へと変化した。その結果文脈に乱れが生じた。
- ・現行 *Suv_S*, *Suv_T* はこの文脈の乱れを保持しているが, *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* (もしくはこれらが基づいた原典) においては, 話者がカウンディニャ婆羅門から一切世間樂見童子へと交替することによって, 文脈の乱れが解消された。

このように想定することによって, 全ての事象に説明がつけられる。再構築された *MMS_S* は以下の通りである。

MMS_S : *śṛṇu tvam Litsavikumāra Mahāmeghasūtram durvijñeyam duranubodham sarvaśrāvakapratyekabuddhānām tādṛśair lakṣaṇaiḥ samanvāgataṁ kila Mahāmeghasūtrād bāhyā bhaviṣyanti⁽⁵³⁾/*

(3-3)

Suv_S : evaṃ bho Litsavikumāra durvijñeyaṃ duranubodhaṃ
Suvarṇabhāsottamasūtram asmākam eva pratyantadvīpikānāṃ
brāhmaṇānāṃ sarṣapaphalamātraṃ dhātuṃ karaṇḍake nikṣipta-
vyam/ ahaṃ te varaṃ yāce yat sattvāḥ kṣipram eva tridaśādhipatyam
pratilābhino bhaviṣyanti/ tvaṃ kiṃ nu Litsavikumāra sarṣapa-
phalamātraṃ dhātuṃ tathāgatasya yācituṃ dhātukaraṇḍake
nikṣipyāvahitasya sarvasattvānāṃ tridaśādhipatyalābha iticchate/
evaṃ mayaiva bho Litsavikumāra varaṃ yācitam// (14.3-9)

Suv_T : kye Liñ tsa byi g'zon nu gSer 'od dam pa'i mdo ni de ltar śes par
dka' žiñ rtogs par dka' bas na/ kho bo cag mtha' 'khob kyi gliñ gi bram
ze rnamś ni/ gañ bcañś na semś can rnamś myur du sum cu rtśa gsum
pa'i bdag po thob ⁽⁵⁴⁾ par 'gyur ba'i riñ bsrel yuñś 'bru tsam za ma tog
gi nañ du bcug la bcañś kyañ ruñ ño// kye Liñ tsa byi g'zon nu khyod
ci de bžin gśegś pa las riñ bsrel yuñś 'bru tsam gsol nas/ riñ bsrel
gyi ⁽⁵⁵⁾ za ma tog tu bcug ste bcañś pas semś can rnamś sum cu rtśa
gsum pa'i bdag po thob par mi 'dod dam/ kye Liñ tsa byi g'zon nu kho
bos ni dam pa de lta bu gsol to// (13.16-25)

Suv_{C2} : 婆羅門言。善哉王子，如是金光明微妙經典功德無邊難解難覺，乃至
如此不可思議，我等辺国婆羅門等作如此説。若善男子及善女人，得仏舍利
如芥子許，置小塔中，暫時礼拝恭敬供養，功德無邊。是人命終作六天主，
受上妙樂不可窮尽。汝今云何而不願樂供養舍利求此報耶。如是王子，以是
因縁我今從仏欲求一恩。(361c19-26)

*Suv*_{C3} : 婆羅門言。善哉童子，此金光明甚深最上難解難入，聲聞獨覺尚不能知，何況我等辺鄙之人，智慧微淺，而能解了。是故，我今求仏舍利如芥子許，持還本処，置宝函中恭敬供養，命終之後得爲帝釈，常受安樂。云何汝今不能爲我從明行足求斯一願。(406a21-27)

*MMS*_T : kye Liñ tsa byi ⁽⁵⁶⁾ gžon nu sPrin chen po'i mdo ni de ltar šes par dka' žiñ rtogs par dka' bas na/ kho bo cag ⁽⁵⁷⁾ mtha' 'khob kyi gliñ gi bram ze rnams ni gañ bcañs na sems can rnams myur du sum cu rtsa ⁽⁵⁸⁾ gsum pa'i bdag po thob par 'gyur ba'i riñ bsrel yuñs ⁽⁵⁹⁾ 'bru tsam za ma tog gi nañ du bcug la bcañs kyañ ruñ ño// kye Liñ tsa byi ⁽⁶⁰⁾ gžon nu khyod ci ⁽⁶¹⁾ de bžin gšegs pa las riñ bsrel yuñs 'bru tsam gsol te/ mnos la za ma tog gi nañ du bcug ste/ bcañs pas sum cu rtsa gsum pa'i bdag por 'gyur ba mi 'dod dam/ kye ⁽⁶²⁾ Liñ tsa byi ⁽⁶³⁾ gžon nu kho bos ni dam pa 'di lta bu gsol to// (195a5-8)

*MMS*_C : 何況我等辺地之人。我今欲得如来舍利如芥子許，恭敬礼拝冀処切利爲彼天主。我從昔来常有此願。(1096c12-15)

*MMS*_T と *Suv*_T には文脈上の相違は見られない。細かいところでは *Suv*_T 6-7行目の“riñ bsrel gyi”の代わりに、*MMS*_T では“mnos la, *pratigṛhya”⁽⁶⁴⁾ となっている程度である。

*MMS*_S の再構築にあたっては、*Suv*_S 3行目の“dhātum”を“dhātuḥ”とし⁽⁶⁵⁾、6行目の“yācitum”を *Suv*_T の“gsol nas”，*MMS*_T の“gsol te”，Nobel [1937] 14.fn 28に基づき“yācitvā”とした。さらに7行目の“icchate”を *Suv*_T，*MMS*_T，Nobel [1937] 14.fn 31に基づき“necchasi”とした。

MMS_S : *evaṃ bho Litsavikumāra durvijñeyaṃ duranubodhaṃ Ma-
hāmeghasūtram asmākam eva pratyantadvīpikānāṃ brāhmaṇānāṃ
sarṣapaphalamātro dhātuḥ karaṇḍake nikṣiptavyaḥ/ ahaṃ te varaṃ
yāce yat sattvāḥ kṣipram eva tridaśādhipatyam pratilābhino
bhaviṣyanti/ tvaṃ kiṃ nu bho Litsavikumāra sarṣapaphalamātram
dhātuṃ tathāgatasya yācitvā pratigṛhya karaṇḍake nikṣipyāva-
hitasya tridaśādhipatyālābha iti necchasi/ evaṃ mayaiva bho Litsavi-
kumāra varaṃ yācitam//*

(4) 一切世間樂見童子が³、世尊の遺骨の不可得性を強調する 13 偈を説く。

(4-0)

Suv_S : atha Sarvalokapriyadarśano Litsavikumāra ācāryavyākaraṇaṃ
Kaunḍinya-brāhmaṇaṃ gāthābhir adhyabhāṣata//(14.10-11)

Suv_T : de nas Liñ tsa byi g'zon nu 'Jig rten thams cad kyis mthoñ na dga'
bas/ slob dpon luñ ston pa bram ze Kau di nya la tshigs su bcad pa dag
gis slar smras pa//(14.1-3)

Suv_{C2} : 是時王子，即以偈答婆羅門言。(361c27)

Suv_{C3} : 作是語已，爾時童子即為婆羅門，而說頌曰。(406a27-28)

MMS_T : de nas ⁽⁶⁶⁾ Liñ tsa byi ⁽⁶⁷⁾ g'zon nu 'Jig rten thams cad kyis mthoñ
na dga' bas/ slob dpon luñ ston pa bram ze Kau ṇḍi nya ⁽⁶⁸⁾ la tshigs
su bcad pa 'di ⁽⁶⁹⁾ dag ⁽⁷⁰⁾ gis slar smras pa//(195a8-b1)

MMS_C : 爾時梨車, 即說偈言。(1096c15)

諸本とも文脈に問題はない。ただ, “slar smras pa” については Nobel [1937] 14.fn 40 に従い, “pratyabhāṣata” と再構築した。

MMS_S : *atha Sarvalokapriyadarśano Litsavikumāra ācāryavyākaraṇa-
Kaunḍīnyam brāhmaṇam ābhir gāthābhiḥ pratyabhāṣata//*

(4-1, 2)

Suv_S : yadā sroteṣu gaṅgāyā roheyuḥ kumudāni ca/
raktāḥ kākā bhaviṣyanti śaṅkhavarṇāś ca kokilāḥ//
(9 : 15.1-2)

jambus tālaphalam dadyāt kharjūraś cāmramañjarīm/
tadā sarṣapaphalamātro vyaktaṁ dhātur bhaviṣyati//
(10 : 15.3-4)

Suv_T : nam žig gañ gā'i chu rgyun la// me tog rnames ni skye ba
dañ//
bya rog dmar por 'gyur ba dañ// khu byug duñ mdog 'drar
'gyur dañ// (9 : 14.4-7)
'dzam bur ta la'i 'bru chags dañ// 'bra gor a mra'i dog pa
chags//
de yi tshe na yuñs 'bru tsam// riñ bsrel du ni gsal bar 'gyur//
(10 : 14.8-11)

Suv_{C2} : 設河駛流中, 可生拘物華, 世尊身舍利, 畢竟不可有。

仮使烏赤色，拘栴羅白形，世尊真実身，不可成舍利。

(9 : 361c28-362a2)

設使閻浮樹，能生多羅果，佉受羅樹等，転生菴羅実，

如来身無滅，不可生舍利。(10 : 362a3-5)

*Suv*_{C3} : 恒河駛流水，可生白蓮華，黄鳥作白形，黒鳥变为赤，

(9 : 406a29-b1)

仮使瞻部樹，可生多羅果，羯樹羅枝中，能生菴羅葉，

斯等希有物，或容可转变，世尊之舍利，畢竟不可得。

(10 : 406b2-5)

Jā 425 : gaṅgā kumudinī santā saṃkhavaṇṇā ca kokilā/

jambu tālaphalaṃ dajjā atha nūna tadā siyā// (77 : 477.6-7)

*MMS*_T : gañ tshe gañ gar ⁽⁷¹⁾ ku mud skyes//⁽⁷²⁾ khu byug duñ mdog
'drar gyur dañ//

'dzam bur ⁽⁷³⁾ ta ⁽⁷⁴⁾ la'i 'bru chags pa// de tshe rin bsrel yod
par 'gyur// (195b1)

*MMS*_C : 仮使恒河中，駛流生蓮花，拘栴羅鳥白，舍利乃可得。(1096c16-17)

一見して分かることは、*Suv* が2 偈で構成されているのに対し、*Jā 425* と *MMS* は1 偈構成であることである。殊に *MMS*_T と *Jā 425* が全く同じ読みをしていることは特筆に値する⁽⁷⁵⁾。*Suv* が2 偈で構成されている箇所はこの (4-1, 2) だけであり、(4-3)以降は全て1 偈構成である。一方 *Jā 425* は全て1 偈構成である。また、*MMS*_T と *Suv*_T を比較すると、*MMS*_T のパーダ b, c

と *Suv_T* の第1偈パーダ d, 第2偈パーダ a が一致している。形式・内容の両面から考えて、ここでもやはり

Jā 425, もしくは類似のソースから *MMS* が一連の偈を採用し、さらにそれを *Suv* が増広に用いたと想定することできる⁽⁷⁶⁾。

以上を総合し, *Jā 425* のパーダ a, *Suv_S* 第1偈パーダ d, 第2偈パーダ a, それに(4-3)以降のパーダ d を用いて, 以下のように *MMS_S* を再構築した。

MMS_S : *gaṅgāyām kumudāni syuḥ śaṅkhavarṇāś ca kokilāḥ/
jambus tālaphalaṃ dadyāt tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-3)

Suv_S : yadā kacchapalomānām prāvāraḥ sukr̥to bhavet/
hemante śītaharaṇas tadā dhātur bhaviṣyati// (11 : 15.5-6)

Suv_T : nam źig rus sbal spu rnams las// gos su legs par btags gyur
te//
dgun gyi grañ ba sel byed pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (11 : 14.12-15)

Suv_{C2} : 設使龜毛等，可以為衣裳，仏身非虚妄，終無有舍利。
(11 : 362a6-7)

Suv_{C3} : 仮使用龜毛，織成上妙服，寒時可被著，方求仏舍利。
(11 : 406b6-7)

Jā 425 : yadā kacchapalomānaṃ pavāro tividho siyā/
hemantikaṃ pāpuraṇaṃ⁽⁷⁷⁾ atha nūna tadā siyā//
(78 : 477.16-17)

MMS_T : nam žig ru⁽⁷⁸⁾ sbal⁽⁷⁹⁾ spu rnamś las// gos⁽⁸⁰⁾ su legs par
btags gyur⁽⁸¹⁾ te//
dgun cha dag tu gyon gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(195b1-2)

MMS_C : 仮使亀生毛, 任作僧伽梨, 冬日能消氷, 舍利乃可得。(1096c18-19)

MMS_T はパーダ a, b, d が *Suv_T*, *Suv_S* と一致し, パーダ c は *Jā 425* と一致している。ここでも *Suv* より *MMS* の方が *Jā 425* との類似性が高い。再構築された *MMS_S* は以下である。

MMS_S : *yadā kacchapalomānāṃ prāvāraḥ sukrto bhavet/
hemantakaṃ prāvaraṇaṃ tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-4)

Suv_S : yadā maśakapādānām aṭṭāla sukrto bhavet/
dṛḍhaś cāpy aprakampī ca tadā dhātur bhaviṣyati//
(12 : 15.7-8)

Suv_T : nam žig sbrañ bu'i rkañ lag las// yañ thog legs par byas gyur
te//

brtan žiñ rab tu mi g-yo ba// de tshe riñ bsrel yod par 'gyur//
(12 : 14.16-19)

*Suv*_{C2} : 仮令蚊蚋脚，可以作城楼，如来寂静身，無有舍利事。
(12 : 362a8-9)

*Suv*_{C3} : 仮使蚊蚋足，可使成楼觀，堅固不揺動，方求仏舍利。
(12 : 406b8-9)

Jā 425 : yadā makasadāṭhānaṃ aṭṭālo sukato siyā/
daḷho ca appakampī ca atha nūna tadā siyā// (79 : 477.18-19)

*MMS*_T : der ni groñ khyer sbas pa'i ⁽⁸²⁾ phyir// nam žig sbrañ bu'i rkañ
lag ⁽⁸³⁾ las//
yañ thog ⁽⁸⁴⁾ legs par byas gyur te// brtan žiñ g-yo ba med pa
dañ// (195b2-3)

*MMS*_C : 仮使蚊子脚，堪任作橋梁，能度一切衆，舍利乃可得。(1096c20-21)

*MMS*_T のみ、次の(4-5)とともに2偈で構成されている。パーダ a は他の諸本に見られない“der ni groñ khyer sbas pa'i phyir”となっており、パーダ b, c, d はそれぞれ *Suv*_T, *Suv*_S のパーダ a, b, c に対応している。*Suv*_S は *Jā 425* に一致しており、*MMS*_C も1偈構成かつ内容が *Suv*, *Jā 425* と同様であるため、*MMS*_T を *Suv*_T の形に改めた上で、*Suv*_S をもって *MMS*_S を再構築した。

MMS_S : *yadā maśakapādānām aṭṭāla sukr̥to bhavet/
dṛḍhaś cāpy aprakampī ca tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-5)

Suv_S : yadā tīkṣṇā mahāntaś ca dantā jāyanti pāṇḍarāḥ/
jalaukānām hi sarveṣāṃ tadā dhātur bhaviṣyati//(13 : 16.1-2)

Suv_T : nam ṣig srin bu pad ma kun// so ni dkar por skyes gyur te//
rno ṣin chen por gyur pa na// de tshe rin bsrel yod par 'gyur//
(13 : 14.20-23)

Suv_{C2} : 仮令水蛭虫，口中生白齒，如來解脫身，終無繫縛色。
(13 : 362a10-11)

Suv_{C3} : 仮使水蛭虫，口中生白齒，長大利如鋒，方求仏舍利。
(13 : 406b10-11)

MMS_T : srin bu pad ma'i ⁽⁸⁵⁾ rva sogs ⁽⁸⁶⁾ la// khyod ni dbaṅ bskur ⁽⁸⁷⁾
sbyor byed de//
der ni 'byor ciṅ rgyas gyur na ⁽⁸⁸⁾// de tshe rin bsrel yod par
'gyur//(195b3)

MMS_C : 仮使水中蛭，忽然生白齒，大如香象牙，舍利乃可得。(1096c22-23)

この(4-5)は **MMS_T** と他の諸本との相違が著しいが，**Jā 425** には相当する
偈がないため，**Jā 425** に対する **Suv** と **MMS** の類似の程度を評価すること

はできない。ただし *MMS_C* の読みが *Suv* と一致しているため、*MMS_T* も本来は *Suv_T* と同様のものではあったと推測される。よって *MMS_S* は *Suv_S* をもって再構築した。

MMS_S : yadā tīkṣṇā mahāntaś ca dantā jāyanti pāṇḍarāḥ/
jalaukānām hi sarveṣām tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-6)

Suv_S : yadā śaśaviṣāṇāna niḥśreṇī sukṛtā bhavet/
svargasyārohaṇārthāya tadā dhātur bhaviṣyati//(14 : 16.3-4)

Suv_T : mtho ris su ni 'dzeg pa'i phyir// nam žig ri boṅ rva rnam
las//
skas ni legs par byas gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(14 : 14.24-27)

Suv_{C2} : 兎角為梯橙，從地得昇天，邪思惟舍利，功德無是処。
(14 : 362a12-13)

Suv_{C3} : 仮使持兎角，用成於梯蹬，可昇上天宮，方求仏舍利。
(14 : 406b12-13)

Jā 425 : yadā sasaviṣāṇānaṃ nisseṇi sukataṃ siyā/
saggassārohaṇatthāya atha nūna tadā siyā//(80 : 477.20-21)

MMS_T : mtho ris su ni 'dzeg ⁽⁸⁹⁾ pa'i phyir// nam žig ri boṅ rva rnam

las ⁽⁹⁰⁾//

skas ni legs par byas gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(195b3-4)

MMS_C : 仮使兔生角, 堪任作梯橙, 高至淨居天, 舍利乃可得。(1096c24-25)

MMS_T と **Suv_T** は同一であり, **Jā 425**, **Suv_S** の読みとも一致している。
よって **Suv_S** をもって **MMS_S** を再構築した。

MMS_S : *yadā śaśaviṣāṇāna niḥśreṇī sukṛtā bhavet/
svargasyārohaṇārthāya tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-7)

Suv_S : tāṃ niḥśreṇīm yadāruhya candraṃ bhakṣayen mūṣikaḥ/
rāhuṃ ca paribādheta tadā dhātur bhaviṣyati//(15 : 16.5-6)

Suv_T : nam ŷig skas ni der 'dzegs te// byi bas zla ba bza' ba dañ//
sgra gcan la yañ gnod byed pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(15 : 15.1-4)

Suv_{C2} : 鼠登兔角梯, 蝕月除修羅, 依舍利尽惑, 解脱無是処。
(15 : 362a14-15)

Suv_{C3} : 鼠縁此梯上, 除去阿蘇羅, 能障空中月, 方求仏舍利。
(15 : 406b14-15)

Jā 425 : yadā nisseṇim āruyha candaṃ khādeyyuṃ mūsikā/
rāhuñ ca paripāteyyuṃ atha nūna tadā siyā// (81 : 477.22-23)

MMS_T : nam žig skas ni der 'dzegs te// byi bas zla ba bza' ba dañ//
sgra gcan la yañ gnod byed pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (195b4-5)

MMS_C : 仮使鼠虫等，縁於兎角梯，在上而食月，舍利乃可得。(1096c26-27)

諸本とも読みはほぼ一致している。**Suv_S**と**Jā 425**との相違点は，**Suv_S**の“mūṣikaḥ” (nom. sg. m.), “bhakṣayen” (Opt. 3rd. sg. caus. <√bhakṣ), “paribādheta” (Opt. 3rd. sg. <pari-√bādh) が，**Jā 425**ではそれぞれ“mūsikā” (nom. pl. m.), “khādeyyuṃ” (Opt. 3rd. pl. <√khād), “paripāteyyuṃ” (Opt. 3rd. pl. caus. <pari-√pat) となっている点である。

MMS_Tは**Suv_T**と同一であるが，**Suv_S**の“bhakṣayen”は韻律に合わないので，**Jā 425**に基づき“bhakṣayen”を“khādetā”と置換し，**MMS_S**を再構築した⁽⁹¹⁾。

MMS_S : *tām niḥśreṇīm yadāruhya candraṃ khādetā mūṣikaḥ/
rāhuṃ ca paribādheta tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-8)

Suv_S : yadā madyaghaṭaṃ pītvā makṣikā grāmacāriṇī/
agāre vāsaṃ kalpeyus tadā dhātur bhaviṣyati// (16 : 16.7-8)

Suv_T : groñ na rgyu ba'i sbrañ bu yis// nam žig rdza ma'i chañ 'thuñs

te//

khyim na gnas par byed gyur pa ⁽⁹²⁾// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(16 : 15.5-8)

Suv_{C2} : 如蠅大醉酒，不能造巢穴，於仏無正行，不能至三乘。

(16 : 362a16-17)

Suv_{C3} : 若蠅飲酒醉，周行村邑中，広造於舍宅，方求仏舍利。

(16 : 406b16-17)

Jā 425 : yadā surāghaṭaṃ pītvā makkhikā gaṇacārīnī/
aṅgāre vāsaṃ kappeyyuṃ atha nūna tadā siyā//

(82 : 477.24-25)

MMS_T : tshogs kyis ⁽⁹³⁾ rgyu ba'i sbran bu yis// nam ųig rdza ma'i
chan 'thuñs ⁽⁹⁴⁾ te ⁽⁹⁵⁾//
khyim na gnas par byed gyur pa ⁽⁹⁶⁾// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(195b5)

MMS_C : 仮使蠅能飲，鍾石淳好酒，迷荒而耽醉，舍利乃可得。(1096c28-29)

MMS_T と *Suv_T* との相違点は、冒頭の “tshogs kyis rgyu ba'i” と “groñ na rgyu ba'i” である。この相違は *Jā 425* と *Suv_S* における “gaṇacārīnī” と “grāmacārīṇī” との相違にそのまま対応している。すなわちこの(4-8)においても、*MMS* の方が *Suv* より *Jā 425* に近いと言うことができる。再構築された *MMS_S* は以下の通りである。

MMS_S : *yadā madyaghaṭaṃ pītvā makṣikā gaṇacāriṇī/
agāre vāsaṃ kalpeyus tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-9)

Suv_S : yadā bimboṣṭhasaṃpanno gardabhaḥ sukhito bhavet/
kuśalo nr̥tyagīteṣu tadā dhātur bhaviṣyati// (17 : 16.9-10)

Suv_T : nam ṣig boṅ bu bder gyur ⁽⁹⁷⁾ la// mchu dmar bim ba 'drar
gyur ciñ//
glu gar rnamś la mkhas gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (17 : 15.9-12)

Suv_{C2} : 如驢但飽食，終無有伎能，歌舞令他樂，
凡夫二乘等，能說及能行，自他無是處。(17 : 362a18-20)

Suv_{C3} : 若使驢唇色，赤如頻婆果，善作於歌舞，方求仏舍利。
(17 : 406b18-19)

Jā 425 : yadā bimboṭṭhasaṃpanno gadrabho sumukho siyā/
kusalo naccagītassa atha nūna tadā siyā// (83 : 477.26-27)

MMS_T : nam ṣig boṅ bu ⁽⁹⁸⁾ bder ⁽⁹⁹⁾ gyur la// mchu dmar bim ba ⁽¹⁰⁰⁾
'drar ⁽¹⁰¹⁾ gyur ⁽¹⁰²⁾ ciñ//
glu gar rnamś la mkhas gyur pa// ⁽¹⁰³⁾ de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (195b5-6)

MMS_C : 仮使驢口唇，形如頻婆果，善能歌詠舞，舍利乃可得。(1097a1-2)

MMS_T と *Suv_T*, *Suv_S* は同一であり，*Jā 425* の読みとも “sumukho” 以外は一致している。よって *Suv_S* をもって *MMS_S* を再構築した。

MMS_S : *yadā bimboṣṭhasaṃpanno gardabhaḥ sukhito bhavet/
kuśalo nṛtyagīteṣu tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-10)

Suv_S : yadā ulūkakākāś ca ramayeyū rahogatāḥ/
anyamanyānukūlena tadā dhātur bhaviṣyati//(18 : 16.11-12)

Suv_T : nam žig 'ug pa bya rog rnam// dben par doñ nas rtse ba
dañ//
phan tshun 'thun par gyur pa na// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(18 : 15.13-16)

Suv_{C2} : 仮使烏与鵄，同時一樹栖，和合相愛念，
如來真實體，舍利虛妄身，俱有無是處。(18 : 362a21-23)

Suv_{C3} : 烏与鵄鵄鳥，同共一處遊，彼此相順從，方求仏舍利。
(18 : 406b20-21)

Jā 425 : yadā kākā ulūkā ca mantayeyyuṃ rahogatā/
aññamaññāṃ pihayeyyuṃ atha nūna tadā siyā//

MMS_T : nām žig khva ⁽¹⁰⁴⁾ dañ 'ug pa dag ⁽¹⁰⁵⁾ // dben par ⁽¹⁰⁶⁾ doñ ⁽¹⁰⁷⁾
 nas smra byed ciñ//
 phan tshun gnod pa mi byed par// dus rnames kun tu ⁽¹⁰⁸⁾ gnas
 der ni//
 rtag tu gnas par byed gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
 'gyur//(195b6-7)

MMS_C : 仮使烏角鴉，同共一樹棲，飲食不相離，舍利乃可得。(1097a3-4)

MMS_T と *Suv_T* の相違点は3点ある。1点目は“khva dañ 'ug pa dag”と
 “'ug pa bya rog rnames”，2点目は“smra byed ciñ”と“rtse ba dañ”で、
 どちらも *MMS_T* の読みが *Jā 425* の“kākā ulūkā ca”，“mantayeyyum”
 と一致している。3点目は *MMS_T* が6パーダより構成されているのに対し、
Suv_T, *Suv_S*, *Jā 425*, *MMS_C* は4パーダによって構成されている点であ
 る⁽¹⁰⁹⁾。このように、*MMS_C* を含めた諸異本が4パーダであることから、*MMS_S*
 も4パーダで構成されるべきである。*MMS_C*, *Suv_T*, *Jā 425* を参照し、*MMS_T*
 を

MMS_T : nar žig khva dañ 'ug pa dag// dben par doñ nas smra byed
 ciñ//
 phan tshun gnod pa mi byed pa// de tshe riñ bsrel yod par
 'gyur//

と訂正した上で、*MMS_S* を再構築した。

MMS_S : *yadā kākā ulūkāś ca mantrayeyū rahogataḥ/
anyonyānapakāreṇa ⁽¹¹⁰⁾ tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-11)

Suv_S : yadā palāśapatrāṇaṃ chatraṃ sthirataraṃ bhavet/
varṣasya pratighātāya tadā dhātur bhaviṣyati//(19 : 17.1-2)

Suv_T : pa la śa yi lo ma rnam// rin chen sna gsum gdugs gyur te//
char 'bab skyabs su nam gyur pa// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur//(19 : 15.17-20)

Suv_{C2} : 如波羅奈葉，不能遮風雨，於仏起虚妄，生死終不滅。
(19 : 362a24-25)

Suv_{C3} : 仮使波羅葉，可成於傘蓋，能遮於大雨，方求仏舍利。
(19 : 406b22-23)

Jā 425 : yadā pulasapattānaṃ chattaṃ thirataṃ siyā/
vassassa paṭighātāya atha nūna tadā siyā//(85 : 478.1-2)

MMS_T : pa la śa yi lo ma rnam// rin chen sna gsum gdugs gyur te//
char 'bab skyabs su ⁽¹¹¹⁾ nam gyur pa ⁽¹¹²⁾// de tshe riñ bsrel
yod par 'gyur//(195b7)

MMS_C : 仮使棘刺葉，周遍覆三千，大千世界上，舍利乃可得。(1097a5-6)

MMS_T と *Suv_T* の読みは一致している。特にパーダ *b* がともに “rin chen sna gsum gdugs gyur te” となっており, “chatraṃ triratnasambhavet” を訳していると思われる点が興味深い。再構築されるべきサンスクリットの読みは *Jā 425* と同様の “chatraṃ sthirataraṃ bhavet” であるため⁽¹¹³⁾, *Suv_S* をそのまま用いて *MMS_S* を再構築した。

MMS_S : *yadā palāśapatrāṇāṃ chatraṃ sthirataraṃ bhavet/
varṣasya pratighātāya tadā dhātur bhaviṣyati//*

(4-12)

Suv_S : yadā samudrikā nāvaḥ sayantrāḥ sapatākikāḥ/
sthalam āruhya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati//
(20 : 17.3-4)

Suv_T : nam ṡig rgya mtsho'i gru bo che// 'khrul 'khor dañ ni g-yog
mor bcas//
thañ la byuñ ste 'gro ba na// de tshe riñ bsrel yod par 'gyur//
(20 : 15.21-24)

Suv_{C2} : 如海大船舶, 具足諸財宝, 新生女人力, 執持無是処。
法身無辺際, 不淨地煩惱, 不能摄如来, 其義亦如是。
(20 : 362a26-29)

Suv_{C3} : 仮令大船舶, 盛満諸財宝, 能令陸地行, 方求仏舍利。
(20 : 406b24-25)

Jā 425 : yadā sāmuddikaṃ nāvaṃ sayantaṃ savaṭākaraṃ/
ceṭo ādāya gaccheyya atha nūna tadā siyā// (87 : 478.5-6)

MMS_T : nam žig rgya mtsho'i gru bo che// 'khrul 'khor dañ ni g-yor
mor bcas//
mi nan pos ⁽¹¹⁴⁾ ni khyer 'gro ba// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (195b7-8)

MMS_C : 仮使小舟船，能載須弥山，度於大海水，舍利乃可得。(1097a7-8)

この(4-12)と次の(4-13)では **Jā 425** の順序が入れ替わっている。このことから、**MMS** と **Suv** が一連の偈を **Jā 425** (もしくは類似のソース) から別々に借用したのではないことが分かる。すなわちここでも、

Jā 425 (もしくは類似のソース) → **MMS** → **Suv**

という流れが想定できる。

この(4-12)における最大の相違点は、**Jā 425** の主語が“ceṭo”(nom. sg. m.)であり、“sāmuddikaṃ nāvaṃ sayantaṃ savaṭākaraṃ”は acc. sg. f.であるのに対し、**Suv_S** (及び **Suv_T**) では“samudrikā nāvaḥ sayantrāḥ sapatākikāḥ”(“rgya mtsho'i gru bo che// 'khrul 'khor dañ ni g-yog mor bcas”)は nom. pl. f.であることである。その関係上、**Jā 425** と **Suv_S**、**Suv_T** では、パーダ c が全く異なっている ⁽¹¹⁵⁾。

一方、**MMS_T** は **Jā 425** とほぼ一致しており、やはり **MMS** と **Jā 425** の類似性の高さが裏付けられる ⁽¹¹⁶⁾。**MMS_S** の再構築は **Jā 425** をもって以下のように行った。

MMS_S : *yadā samudrikām (acc. sg. f.) nāvaṃ sayantrāṃ sapatāki-
kām/
ceṭā (nom. pl. m.) ādāya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati//*

MMS_T の “mi ñan pos” の代わりに異読の “mi ñan mos” を採用すると、
MMS_S を別の形で再構築することも可能である⁽¹¹⁷⁾。

MMS_S : *yadā samudrikā (nom. pl. f.) nāvaḥ sayantrāḥ sapatākikāḥ/
ceṭyā (instr. sg. f.) hy⁽¹¹⁸⁾ ādāya gaccheyus tadā dhātur
bhaviṣyati//*(再構築例2)

MMS_S : *yadā samudrikā (acc. pl. f.) nāvaḥ sayantrāḥ sapatākikāḥ/
ceṭya (nom. pl. f.) ādāya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati//*
(再構築例3)

MMS_S : *yadā samudrikām (acc. sg. f.) nāvaṃ sayantrāṃ sapatāki-
kām/
ceṭya (nom. pl. f.) ādāya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati//*
(再構築例4)

(4-13)

Suv_S : yadā ulūkaśakunāḥ parvataṃ gandhamādanam/
tuṇḍenādāya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati// (21 : 17.5-6)

Suv_T : nam žig bya ni 'ug pa yis// ri bo spos kyi ñad ldan pa//
mchu la thogs te 'gro 'gyur ba// de tshe riñ bsrel yod par
'gyur// (21 : 15.25-28)

*Suv*_{C2} : 譬如諸鳥雀，不能銜香山，煩惱依法身，不為煩惱動。
如是如來身，甚深難思量，若不如法觀，所願不成就。

(21 : 362b1-4)

*Suv*_{C3} : 假使鷦鷯鳥，以嘴銜香山，隨處任遊行，方求仏舍利。

(21 : 406b26-27)

Jā 425 : yadā kuluṃko sakuṇo pabbataṃ gandhamādanam/
tuṇḍenādāya gaccheyya atha nūna tadā siyā// (86 : 478.3-4)

*MMS*_T : nam žig bya ni ku laṅ kas ⁽¹¹⁹⁾// ri bo spos kyi ṇad ⁽¹²⁰⁾ ldan
pa ⁽¹²¹⁾//
mchu la thogs te ⁽¹²²⁾ 'gro gyur pa ⁽¹²³⁾// de tshe riṅ bsrel yod
par 'gyur// (195b8-196a1)

*MMS*_C : 假使小鳥雀，嘴銜大香山，移置於他處，舍利乃可得。(1097a9-10)

*MMS*_T と *Suv*_T の相違点は、パーダ a の “ku laṅ kas” と “ug pa yis” であり、ここでも *MMS*_T の読みが *Jā 425* と一致している。再構築された *MMS*_S は以下の通りである。

*MMS*_S : *yadā kuliṅgaśakunāḥ parvataṃ gandhamādanam/
tuṇḍenādāya gaccheyus tadā dhātur bhaviṣyati//*

8. *MMS* —— *Suv* 増広部の出典

以上、7において増広部(1)から(4)に至るまで、諸本対照に基づき *MMS* と *Suv* の関係を詳述してきた。すでに提示されていた「登場人物の問題」(4.2, 5.2, 7.(1)), 「文脈の齟齬」(4.2), 「思想的脈絡」(6), 「漢訳者の問題」(6) を7の記述と併せれば、そこから導かれる論理的帰結はもはや一つしかない。本稿はここにおいて、

“*Suv* の増広部の出典は *MMS* であり、*Suv* は *MMS* を受けて増広を行った”

と結論するものである⁽¹²⁴⁾。

9. 結び

本稿において *Suv* の増広部の出典が *MMS* であることが確認された。今後この成果に基づき、引き続き増広部(5), (6)の諸本対照を行い、その全貌を明らかにする。

また、本稿では特に触れることができなかったが、*MMS* の主要登場人物である一切世間楽見 (Sarvalokapriyadarśana) 童子は「如来常住 (tathāgatanityatā, -nityatva) 思想」と密接に関係していると考えられるため、童子が主要登場人物であるもう一つの経典『大法鼓経』(*Mahābherīśūtra*, *MBhS*)⁽¹²⁵⁾とも連絡させつつ、童子と「如来常住思想」ととの関係を考察していきたい。

〈略号及び使用テキスト〉

MMS *Mahāmeghasūtra* (『大雲経』)。

MMS_T The Tibetan version of the *MMS*. (P No.898)

MMS_C The Chinese version of the *MMS*. (T. No.387)

- Suv** *Suvarṇaprabhāsa* (『金光明經』)。
- Suv_S** *Suvarṇabhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937.
- Suv_T** *Suvarṇaprabhāsottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leiden, 1944.
- Suv_{T1}** The first Tibetan version of the **Suv**. (P No.176)
- Suv_{T2}** The second Tibetan version of the **Suv**. (P No.175)
- Suv_{C1}** The first Chinese version of the **Suv**. (T. No.663)
- Suv_{C2}** The second Chinese version of the **Suv**. (T. No.664)
- Suv_{C3}** The third Chinese version of the **Suv**. (T. No.665)
- T₄₈₁** The Manuscript of the **Suv** belonging to the University of Tokyo, No.481.
- T₄₈₂** do., No.482.
- T₄₈₃** do., No.483.
- AAA** *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitāvyākhyā*, ed. U. Wogihara, Tokyo, 1932.
- Jā 425** *Aṭṭhāna-Jātaka*, ed. V. Fausbøll, Vol.III, PTS, 1883.
- LAS** *Laṅkāvatārasūtra* (『楞伽經』), ed. B. Nanjio, Kyoto, 1956.
- RGV** *Ratnagotravibhāga-mahāyanottaratantraśāstra* (『宝性論』), ed. E. H. Johnston, Patna, 1950.
- D** Derge (sDe dge) Kanjur.
- L** Lhasa (lHa sa) Kanjur.
- N** Narthang (sNar than) Kanjur.
- P** Peking Kanjur.
- S** Stog (sTog) Palace Manuscript Kanjur.
- T** Tokyo (Kawaguchi Collection) Manuscript Kanjur.

- T. Taisho Tri-Pitaka (大正新脩大藏經)。
- BHS-G *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, ed. F. Edgerton, Vol. I: Grammar, New Haven, 1953.
- Mvy *Mahāvvyutpatti*, ed. R. Sakaki, Kyoto (reprinted in Tokyo), 1981.
- MW *A Sanskrit-English Dictionary*, ed. M. Monier-Williams, Oxford, 1899.

1 Suzuki [1996]。

2 他にもチャンドラダースの未完の刊本(筆者未見)や、京都出版本と言われる泉刊本(Idzumi [1931]), バグチ刊本(Bagchi [1967])もある。詳しくは壬生[1987] 8-9, 及び鈴木[1997b] 319-322を参照されたい。

また、本研究においてはJ. Nobelの参照していない東京大学図書館所蔵の写本T₄₈₁, T₄₈₂, T₄₈₃も参照した(それぞれ松濤目録のNo.481, 482, 483を指す)。

3 P No.174も『金光明經』('phags pa gSer 'od dam pa mcog tu rnam par rgyal ba'i mdo sde'i rgyal po theg pa chen po'i mdo, tr. by Chos grub (法成))であるが、Suv_{C3}からの重訳であるため、本研究の性格上リストから除いた。諸本比較対照には校訂テキストであるSuv_Tを用いる。

4 上記の諸本間には系統の違いが存在するが、それらの発展段階を分量を基に簡略化して示せば、

$Suv_{C1} \rightarrow Suv_S, Suv_{T1} \rightarrow Suv_{C2} \rightarrow Suv_{T2} \rightarrow Suv_{C3}$

となる。

5 Suv_S 12.6-19.4, Suv_T 12.13-17.19, Suv_{C2} 361b25-362c3, Suv_{C3} 406a1-c21.

6 妙幢 (Suv_{C3} 404b28), mDzes pa'i tog (Suv_T 8.2)

7 不動 (Suv_{C3} 404c16), Mi 'khrugs pa (Suv_T 9.8)

8 天鼓音 (Suv_{C3} 404c16), rNa sgra (Suv_T 9.11)

9 Suv_S 12.6-19.4. Suv_{C2}, Suv_{C3}, Suv_{T2}にはさらに別の増広箇所があるが、今回は扱わない。

- 10 Suzuki [1996] 495.
- 11 カウンディニヤ婆羅門はこの増広部の他に、第7章 *Sarasvatīparivarta* にも登場する (*Suv_S* 108.3, 110.1 ; *Suv_T* 83.23, 85.13 ; *Suv_{C2}* 387b10, 387c10 ; *Suv_{C3}* 436a3, 437a2)。しかしその箇所は本稿で扱う範囲と同様に、*Suv_{C1}* にはない増広部である。
- 12 本稿 7.(1)参照。
- 13 Nobel [1937] 18.fn 25, 19.fn 14 参照。
- 14 Hastikakṣye Mahāmeghe Nirvāṇāṅgulimālike/
Laṅkāvatārasūtre ca mayā māṃsaṃ vivarjitam//(*LAS* 258)
高崎 [1974] 219, 295, 下田 [1997] 415, 675 参照。
MMS の原形の成立は、*MMS* の名が『大智度論』に引用されていることから判断して、龍樹以前と考えて大過ないであろう(高崎 [1974] 300-301)。従前研究はこの高崎 [1974] を除き、皆無の状態である。
- 15 Tibetan Kanjur の系統を考慮すれば、資料として P, N, S, T を用いたことにより東西の系統は網羅されている。ただし今日までの学界の慣例と便宜に鑑み、参考として D, L も参照した(異読の表記に際しては D, L は() 付けで表示)。Harrison [1992] xvi-l, 下田 [1993] xxxvi-xxviii, [1997] 158-159 参照。
なお、*MMS_T* のロケーション表示は P を用いることとする。
- 16 壬生 [1987] 7-8, 14-25, 35, 118-121, 鈴木 [1997b] 320.
- 17 (5),(6)は *MMS* の中心思想に関わる問題を多く含むため、諸本対照と考察は改めて行うこととする。*MMS* と *Suv* の貸借関係を結論付けるには、*Jā 425* との共通部分がある(4)までを扱えば十分である。
- 18 まず手続きを説明しておく。異本異訳の対応箇所を列記し、*Suv_T* と *MMS_T* をまず第一に比較し、次にその他の諸本を参照しつつ、最終的には *Suv_S* (及び *Jā 425*) を使用して、*MMS_S* を再構築する。その際再構築される読みは上記諸本対照から論理的帰結として導かれる、まさに「ありうべき読み」であり、決してサンスクリット原典・オリジナルテキストを回収したのではないことを予め注意しておきたい。かつ、その「ありうべき読み」も、インド語で書かれた文献—今回は特に *Suv_S* と *Jā 425* が中心になる—に同様の読みが確認される場合に限定しており、決して恣意的なサンスクリット作文を行ったのではないことにも留意しておきたい。以上のような観点から、通常使用されている「還梵」という言葉ではなく、一般的でないことを承知で「再構築」という言葉を用いた

(この「再構築」の用語は、1996年9月立正大学において開催された日本印度学仏教学会第47回学術大会の際に、国際仏教学大学院大学教授津田真一先生よりご教示賜ったものであることを付記しておく)。

上記手続きに従って再構築された *MMS*_S を参照することにより、*MMS* をインドの脈絡だけではなく、インド語の文脈の中で *Suv*_S や *Jā* 425 と比較対照させることができるようになる。

- 19 *MMS*_T, 写本 A, B, C, D, E, T₄₈₁, T₄₈₂, T₄₈₃ に従い挿入 (T₄₈₁, T₄₈₂, T₄₈₃ 以外の写本については Nobel [1937] の記述をそのまま採用する)。
20 *MMS*_T, 写本 A, B, D, E, T₄₈₁, T₄₈₂, T₄₈₃ を参照し, 'di skad ces を挿入。
21 N (, L): Kauṇṭi nya S, T: Kau di nya (D: Kauṇḍi nya)
22 P, T: brce (?)
23 S: g'zin
24 P: nas
25 さて、ここでカウンディニヤ婆羅門について考察しておこう。

“Kauṇḍinya” という名、さらに “vyākaraṇa” という修飾句がついていることから、後世この婆羅門が「授記を受けた憍陳如」と解釈された可能性がある。事実、Nobel [1937] 12.fn 17, 13.fn 5, 14.fn 39, 17.fn 19 にあるように、この “vyākaraṇa” の部分を “vyākaraṇaprāpta” と読む写本も存在するのである。上記 *Suv*_{C2}, *Suv*_{C3} において「聖記」, 「法師授記」という記述が見られるのは、*Suv*_{C2}, *Suv*_{C3} の訳出の際に参照されたサンスクリット原典に “vyākaraṇaprāpta” という読みが存在していたことを示すものであろう。

このような状況も手伝ってか、Idzumi [1931], Bagchi [1967] においては “vyākaraṇaprāpta” の読みを採用してしまっており、泉 [1933] はこの婆羅門を「親教師に授記を得たる憍陳如」と翻訳している。壬生 [1987] 70 においても *Suv*_{C3} の「法師授記」が *Suv*_S の “ācāryavyākaraṇa” に相当すると解説しているのみで、それ以上の考察は加えられていない。

確かに、*MMS* においてはこの婆羅門は「未来世にアショーカ (Mya ṇan med, *Aśoka, 阿叔迦) 王になる」と授記を受けるのであるが (*MMS*_T 198b5, *MMS*_C 1097c23), その箇所はこの *Suv* における増広部には相当していない。そもそも *Suv* においてはこの婆羅門が授記を受ける(受けた)という記述はどこにも存在しない。

“ācāryavyākaraṇa” という記述に注目し、このカウンディニヤ婆羅門を「婆

羅門の文法家カウンディニャ師」と解釈すべきであろう (cf. MW 315)。

- 26 N: Li tsā bi'i S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Lid tsa bī)
 27 N (, L): Kauṇṭi nya S, T: Kau di nya (D: Kauṇḍi nya)
 28 P, N (, D): ji (L: om. ci)
 29 N: khyed(?)
 30 N: gsal(?)
 31 P, N (, L): om. no
 32 *Suv_T* に見える “de nas” が *MMS_T* にはない。*MMS_C* の “是時” から判断して、(1)の *MMS_T* 末尾にある “nas” をここに再構築したものである。
 33 T: kye ma
 34 N: Li tsā bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)
 35 N (, L): kyis
 36 N: om. gyis (L: ba)
 37 S: po
 38 P, N: pa
 39 P, N (, L): ka
 40 P: du
 41 P, N: ces
 42 N: Li tsa bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)
 43 S, T: mdo//
 44 S: om. dañ
 45 N (, L): pa'an
 46 P, S, T (, D): du
 47 S, T: grag
 48 Nobel [1937] 13.fn 22, Idzumi [1931] 12.fn 1. 特に前者は「文章が全く混乱しており、編集した者たちが無理解に補正し改竄してしまったようだ」とまで述べている。しかし本稿に記すように、この指摘は誤りである。
 49 泉 [1933] 13 はこの意味で解釈している。どちらの読みをよるにせよ、文脈・意味ともに不明確なままであることに変わりはない。
 50 *Suv_T*, *Suv_{C2}*, *Suv_{C3}* の基づいた原典には、“bhāvayaṣyati”ではなく√bhāṣの活用形 (bhāṣayaṣyati, bhāṣayaṣyāmi etc.) があったことが予想される。
 51 *MMS_C* は必ずしも原典に忠実な訳とは言えず、また冗長な部分を省略する傾向を持っているため、本来 *MMS* にこの文が存在していなかったとは言い切れ

ない。高崎 [1974] 277 参照。

52 サンسكريット語の “ito bāhyāḥ” が “di las phyi rol tu gyur pa” とチベット訳されている例がある (*RGV* 28.6, 中村 [1967] 53.12)。

53 *Suv_S* は sg.(bhāvayīṣyati) に作るも、写本 C, T₄₈₁, T₄₈₂, T₄₈₃ (bhāvayīṣyanti), 及び文脈(表示されていないが、主語は sarvaśrāvakapratyeka-bud-dhāḥ) に従い pl.を採用。

54 'thob を Nobel [1944] 13.fn 161, *Suv_{T2}* (165a4), *MMS_T* に従い訂正。

55 Nobel [1944] 13.fn 165, *Suv_S*, *Suv_{T1}* (5a5) に従い gyi を挿入。

56 N: Li tsā bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)

57 P: cig(?)

58 T: om. rtsa

59 P: yañs

60 N: Li tsā bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)

61 P, N (, D): ji

62 N (, L): kye ma

63 N: Li tsā bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)

64 *AAA* に “pratigrhya” を “mnos nas” と訳している例がある (*AAA* 14.29, P No.5189 Cha 14b7)。

65 nom.が必要とされるための訂正である。これは *Suv_S* において dhātu の nom. sg.が dhātuḥ として表れている(7. (4-1)以下参照)ことに基づく訂正で, Cl.Skt. における用例を踏襲したものではない。

66 P, N, S, T (, D, L): om. de nas 文脈と *MMS_C*, *Suv_S*, *Suv_T* の読みより補った。

67 N: Li tsā bi S: Li tsa byi T: Lid tsa byi (D: Lid tsha bī L: Li tsa bī)

68 N (, L): Kauṇṭi nya S, T: Kau di nya (D: Kauṇḍi nya)

69 N (, D, L): om. 'di

70 P: bdag

71 P: gañ gir S: 'gañ gar (L: gañgār)

72 P, N, S, T (, D, L) 全てに byi ba glañ chen tsam gyur dañ// という句が挿入されている。パーダ数が5 になってしまうため, *MMS_C*, *Jā 425* を参照し削除した。

73 P (, D): 'dzam bu N: dzambu (L: dzambur)

74 N: dā

- 75 パーダ d に関しては **Jā 425** が “*atha nūna tadā siyā*”, **MMS_T** が “*de tshe riñ bsrel yod par 'gyur*” という異なった読みをしている。しかし、このパーダ d は (4-3) 以降繰り返し続けられる決まり文句であるため、本研究では「パーダ a, b, c の読みが一致すれば両者は同じである」と評価する立場をとる。(4-3) 以降でも **MMS** と **Jā 425** が一致し、**Suv** が一致しないという箇所が多い。
- 76 **Suv_S** 第 1 偈パーダ b に見える “*kumudāni*” は写本 A, B, D, E, T₄₈₂, T₄₈₃ で “*kusumāni*” とあり (T₄₈₁ は “*kṣasumāni*” (9b3)), **Suv_T** の “*me tog rnams*” も “*kusumāni*” の読みを指示する。しかるに Nobel [1937] 15.fn 4 においては、**Suv_{C2}** に「拘物華」、**Suv_{C3}** に「白蓮華」、さらに **Jā 425** に “*kumudini*” とあることから、“*kumudāni*” の読みを採用している。この判断の正当性は **MMS_T** に “*ku mud*”, **MMS_C** に「蓮花」とあることから裏付けられる。
- 77 Nobel [1937] 15.fn 17 は「**Jā 425** の “*hemantikam pāpuraṇam*” は無意味であり、サンスクリットに対応して訂正すべき」と述べるが、**MMS_T** から **Jā 425** の読みは支持されるため、この提案は採用しない。
- 78 (L: rus)
 79 N: spal
 80 N: yos
 81 S: 'gyur
 82 S: sba ba'i T: spa ba'i
 83 S: lags
 84 S: rtogs T: tog
 85 S, T (, L): padma'i N: badma'i(?)
 86 P: sbogs
 87 T: skur (L: bkur)
 88 S, T: la
 89 S: 'dzegs
 90 P (, D): la
 91 **MMS_C** に「等」の語があること、**Jā 425** が pl. で構成されていることを考えると、**MMS_S** を

MMS_S : *tām niḥśreṇīm yadāruhya candraṃ khādeyur mūṣikāḥ/
 rāhuṃ ca paribādheran tadā dhātur bhaviṣyati//*

と再構築することも可能であろう。その際、“*khādeyur*” は “*khāderan*”, 韻律を考慮に入れるならば “*khādeyu*” という形にも再構築できる (BHS-G 29.1).

- 92 'gyur ba を Nobel [1944] 15.fn 196, *Suv*_{T2} (165b4), *MMS*_T に従い訂正。
 93 S, T: kyi
 94 P, N (, L): 'thuñ
 95 (L: ste)
 96 S: 'gyur pa T: 'gyur ba
 97 'gyur を Nobel [1944] 15.fn 198, *Suv*_{T1} (5b4), *Suv*_{T2} (165b4), *MMS*_T
 に従い訂正。
 98 P: bu boñ N: buñ bu
 99 N: der
 100 P, S (, D, L): pa
 101 P, N, S, T (, D): 'dra
 102 P, N (, D): 'gyur
 103 S: om. "glu gar rnams la mkhas gyur pa//"
 104 N (, L): khra
 105 P, N (, D): dañ
 106 N: pa T: bar
 107 S: 'dod T: 'doñ
 108 P: du
 109 ただし、本文中に記したようにパーダ b に関して *Suv*_T, *Suv*_S と *Jā* 425 は一致していない。*MMS*_C も *MMS*_S が 4 パーダ構成であることを支持するため、*MMS*_T が 6 パーダ構成であることだけで、*MMS* の *Jā* 425 との類似性が *Suv* より低いとは言えない。
 110 cf. Mvy 2107.
 111 N: skyabsu
 112 P, N, S, T (, D): 'gyur ba
 113 Nobel [1937] 17.fn 3.
 114 P, S, T: mos (D: dos)
 115 この相違の一因は、パーリ語では -eyya が Opt. 3 rd. sg. を表すのに対し、サンスクリット語では -eyus が Opt. 3 rd. pl. を表すことにあるように思われる。
 116 パーダ b で *MMS*_T の "g-yor mor" に対し、*Suv*_T は "g-yog mor" と読む。*MMS*_T の読みの方が妥当である。
 117 *Suv*_{C2} に「女人力」という読みがあるため、あるいはこちらの読みを採るべきかも知れない。ただし *Jā* 425 を考慮する限り、最初に再構築された文が支持

される。

- 118 “ceṭyā” と “ādāya” との間の saṃdhi を防ぐため挿入した。“hy” を入れず hiatus を残すことも可能であるが (BHS-G 4.56), (4-4) で saṃdhi を防ぐための “apy” が *Suv*_S のパーダ c に挿入されていることを考慮した。

- 119 (L: ku laṅkas)
 120 P: daṅ N: ṇaṅ
 121 N (, L): po
 122 P: ta
 123 P: 'gyur gyi N, S, T (, D): 'gyur ba
 124 cf. Suzuki [1996] 493.fn 5.
 125 鈴木 [1997a].

(参考文献)

- 泉 芳璟 [1933] 『梵漢対照 新訳金光明經』, 東京: 大雄閣。
 下田正弘 [1993] 『藏文和訳『大乘涅槃經』 I』, 東京: 山喜房仏書林。
 [1997] 『涅槃經の研究』, 東京: 春秋社。
 鈴木隆泰 [1997a] 如来常住經としての『大法鼓經』, 『仏教文化研究論集』 1, 39-55。
 [1997b] 金光明經, 『大乘經典解説事典』, 東京: 北辰堂, 319-322。
 高崎直道 [1974] 『如来藏思想の形成』, 東京: 春秋社。
 中村瑞隆 [1967] 『藏和对訳 究竟一乘宝性論研究』, 東京: 鈴木学術財団。
 壬生台舜 [1987] 『金光明經』(仏典講座 13), 東京: 大蔵出版。
- Bagchi, S. [1967] *Suvarṇaprabhāsa-sūtra* (Buddhist Sanskrit Text No.8), Darbhanga.
- Harrison, P. [1992] *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra, A Critical Edition of the Tibetan Text (Recension [A] based on Eight Editions of the Kanjur and the Dunhuang Manuscript Fragment)*, Tokyo.
- Idzumi, H. [1931] *The Suvarṇaprabhāsa Sūtra, A Mahāyāna Text called “The Golden Splendour”*, Kyoto.
- Nobel, J. [1937] *Suvarṇabhāṣottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Nach den Hand-*

schriften und mit Hilfe der Tibetischen und Chinesischen Übertragungen, Leipzig.

- [1944] *Suvarṇaprabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch*, Leiden.

Suzuki, T. [1996] The *Mahāmeghasūtra* as an origin of an interpolated part of the present *Suvarṇaprabhāsa*, *JIBS* 89, 495-493(L).

(本稿は、平成9年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(A))による研究成果の一部である)